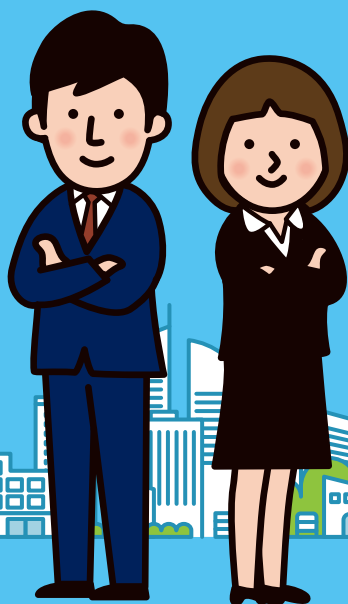


連載エッセイ
essay

第11回

1年目の勤務を 終えて



なかざわ ゆい こ
仲沢 結子

(一財)
砂防・地すべり技術センター
総務部 契約・経理課 主事

この記事執筆するにあたり、1年間の思い返すと月並みな表現ではありますが「あつという間だった」と感じました。ですが、その1年間は内容の濃い非常に充実したものでした。砂防のことはもとより、社会人としての基本的な姿勢やマナーを学ぶことから始め、自分の無知さ、無力さを痛感し、これからSTCの一員としてやっていけるか思い悩む日々を過ごしていました。しかし、職員皆様の暖かく優しいご指導のもと、少しずつではありますが仕事を覚え、コミュニケーションを取る余裕も出てきました。また、仕事終わりに総務部や他部署の諸先輩方、同期と食事会に行くなどの社会人らしい過ごし方もできてきました。その場で雑談していると徐々に仕事の話になり、日頃、技術職員がどのような業務を行っているか聞くことができます。悩ましいこともあるようですが仕事へのやりがい、そして砂防への愛があることをひしひしと感じます。事務職員の私は業務で現場に行くことはないと考えていたので技術職員の話聞くことでしか砂防を感じられなかったのですが、STCで「人材育成プログラム」が立ち上がり、経験年数5年未満の事務職員も現場に行く機会が設けられました。このような機会を設けていただいたこと、大変嬉しく思いました。事前講習を受け、私は作業服に身を包み、昨年の10月中旬に山梨県の春木川での現地実習に参加し、そこでは内勤だけでは得られない経験を積ませていただきました。私が印象深く感じたことは、河床材料を採取した後、掘削した穴を事故のないように埋め戻す作業をしていたことです。人命や暮らしを守るために行われる砂防事業の根底はそのような小さな配慮から成り立っているのだと感じました。それと同時に技術職員が砂防と真摯に向き合い、尽力している姿を目の当たりにしたことから、事務職員としてサポートできることを誇りに思い、自分はどのように貢献できるのか、改めて思い直す1日となりました。

た。今年も現場に行く機会をいただいたので去年とは違う着眼点で人材育成プログラムに参加したいと考えています。

今後の展望

2年目を迎え、総務課から契約・経理課に異動となり、業務内容ががらりと変わりました。総務課とはまた違う難しさ、やりがいを感じております。複雑な業務や聞き慣れない専門用語を聞くと右も左も分からなかった1年前の自分と重なります。そのような1年前の自分に伝えたいことがあります。それはあなたの周りは優しく信頼できる人ばかりだということです。わからないことを質問すると手を止め、しっかり向き合ってくれること、ミスをしたとしても「気にしないでいいよ。初めからできる人なんていないから少しずつ覚えていこう。」とこやかに声をかけてくれること、その行動に、言葉に私は励まされ、2年目を迎えることができました。この4月から私にも後輩ができ、業務を教える側に回ることもあります。諸先輩方が私にしてくれたように後輩にも接することが私の義務であり、せめてもの恩返しでもあると考えています。そし



砂防堰堤に設置されている観測機器
(ハイドロフォン、自動採水器)の確認



春木川橋にて保全対象の確認および橋梁の桁下クリアランスの計測

て、その想いを後輩が受け継ぎ、次世代に繋いでくれることを心から願っています。

2年目を迎えたことにあたって私が課題としていることは計画力を養うことです。経理の業務は数字を扱うことから正確さはもちろん、振込日などが明確に決められていることが多いです。そのため、あらゆる課題に対して優先順位をつけ、適切な時間を見積もることが円滑に業務を進める第一歩だと考えています。まずは自分に与えられた業務をしっかりと遂行すること、ゆくゆくは先回りしてサポートする、つまり気遣いのできる人になることが今後の目標です。

最後に大変恐縮ですが未来の自分にメッセージを残させてください。私の事ですからきっと人生の節目節目にこのエッセイを読み直していることだと思います。このような大それたことを機関誌に記し、恥ずかしくなっている頃でしょうか。将又、胸を張ってやりたい自分になれたと思えているのでしょうか。どちらにせよここまで頑張ってきたのは決してあなただけの力ではありません。周囲の人や家族、友人のサポートがあってこそです。自分の能力に慢心せず、他者への感謝と初心の気持ちを忘れないでください。何年後かの自分へ23歳の私が期待を込めて、締め言葉とさせていただきます。